

## 16 小腹と少腹の位置

木場 由衣登

日本鍼灸研究会

「小腹」と「少腹」は、腹部の一部位を意味する言葉であり、日本漢方や鍼灸、そして腹診や病證を考えるにおいても重要である。これら「小腹」と「少腹」は、醫學典籍に多く記載され、この二つを同じ言葉として扱うべきか、それとも別の身體部位を示しているのかを明確にしたい。

『釋名』釋形體には、「自臍以下曰水腹、水洩所聚也。又曰少腹、少小也。比於臍以上為小也」とあり、これによると、臍より下は小さいから「小腹」と呼び、「少腹」もまた同じとある。では、醫書でも同じであろうか。それとも明確な使い分けがあるのであろうか。

まずは『黄帝内經』の「小腹」と「少腹」を見てみる。顧從徳本を用いて『素問』の「少腹」の記載を探してみる。すると、五十九例の記載があるが、「小腹」

の記載はたった二例しかない。王冰註も經文を受けてほとんどが「少腹」を記載する。しかし王冰註には「少腹」の位置についての記載が見られる。『素問』刺禁論「少腹謂齋下也」、骨空論「少腹齋下也」、氣交變大論「少腹謂齋下兩傍膠骨内也」である。ここでの「少腹」は「臍の下」、もしくは「臍下の兩傍」ということになる。「小腹」については分からない。

『靈樞』（無名氏本）では、二十箇所の記載が見られ、その中で「小腹」は八割、「少腹」は二割ほどである。ところが、「靈樞」の記載を『太素』と比較すると、「靈樞」の「小腹」は『太素』で多くが「少腹」に作られている。「靈樞」が意圖的に「小腹」を使用しているように見えず、「靈樞」での「小腹」が『甲乙經』では「少腹」に作られることが多い。また、『甲乙經』の『明堂』引用條文においては、五十七の記載中、八割が「少腹」である。

『黄帝内經』を中心に後漢代においては、「少腹」が常用されていたか、もしくは宋改時に「少腹」を撰擇的に使用した可能性が見られる。

王叔和の『脈經』（何大任本）、『傷寒論』（明趙開美本）でも「少腹」が圧倒的に多く、「小腹」は少ない。だが、『金匱要略』（元鄧珍本）では、「小腹」が十二例で、「少腹」は六例と少ない。これらは、他の版本で校勘する必要があるのであろう。

隋唐代の醫書では、逆に「小腹」の方が多く記載される傾向がある。『千金要方』における「小腹」と「少腹」を比較すると、六割が「小腹」と多い。『孫真人千金方』も同様に「小腹」が多い。『諸病源候論』では八割が「小腹」で、残りの二割が「少腹」である。隋唐代に「少腹」と「小腹」の位置を明記した条文としては、『千金要方』巻四「治白崩方。灸小腹横文當臍孔直下百壯」、『千金翼方』巻二十六「白崩中。灸少腹横文當臍孔直下一百壯」がある。しかし、「小腹」と「少腹」はともに「臍の直下」だと示されており、二つの意味に相違は見られない。

隋唐代までの醫書が整理される宋代になり、漸く轉機が訪れる。『太平御覽』に「有小腹之別、臍下日小腹、臍下旁日少腹」と分別するようになった。

そして、金元代では、劉完素の『傷寒直格』巻上・經絡病證に「少腹臍下兩旁」という記載が見られ、明代には、『黃帝內經靈樞註證發微』馬蒔註に「臍下爲小腹」とあり、明確な使い分けが廣まって行く。

以上を纏めると、後漢代から隋唐代までの醫書に「小腹」と「少腹」の明確な使い分けは見られず、各醫書とも、「小」と「少」を同様に扱い、書き改められることも屢々であった。使い分けが明瞭になりはじめたのは、宋代以降であり、金元から明代にかけて徐々に使い分けが定着したのであろう。そして、現代中醫學においては、「小腹」と「少腹」は全く別の區畫として扱っている。

ところが、日本では、江戸時代の古方派による腹診書や、昭和期の漢方家の醫書を見ても、明確に分けている例が少ない。寧ろ、診断や病證に關して、「小腹」と「少腹」を別々の部位として讀む必要があるとすれば、日本では近年だけではないだろうか。